トップニュース

東日本、阪神・淡路大震災の経験語る
「悲しみとともに生きる」
1月17日に龍谷大学でシンポジウム

龍谷大学で行われたシンポジウム。菅原文子さん㊨が東日本大震災、鍋島直樹さんが阪神・淡路大震災の経験を語った

宗門校の龍谷大学大宮学舎（京都市下京区）で1月17日、シンポジウム「夫への恋文～大震災の悲しみに寄り添う」が開催され、東日本大震災で夫と両親を失った宮城県気仙沼市の菅原文子さんと、阪神・淡路大震災を経験した鍋島直樹教授が「悲しみから生まれるものは何か」について語り合った。学生など150人が聴講した。

能登半島地震で亡くなった人への哀悼と、被災した人々への見舞いの言葉を述べて始まったシンポジウム。

神戸市で生まれ育った鍋島直樹教授は1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災の経験を語った。亡くなった門徒の葬儀ができず、3月に葬儀をし、多くの人々が参拝する姿に、もう一度、釈尊や親鸞聖人の聖典を読み直し、離別の悲しみをどう受け止めたらよいのかを真剣に求めたという。

「悲しみが生きる力に変化」
被災者にはつらい「がんばって」

そして、自著『死別の悲しみと生きる』（本願寺出版社刊）のタイトルをつけるときのやり取りを紹介。

「編集者は『死別の悲しみを超える』を提案してくれたが、私の周りにはだれも死別の悲しみを乗り越えて元気に生きている人はいない。むしろ死別の悲しみを感じながら、亡き人の愛情とともに生きている方々ばかり。死別の悲しみは乗り越えるのではなく、そのまま愛や慈しみであると感じている」と説明し、仏の願いに触れることによって「悲しみとともに生きる」道があることを語った。

宮城県気仙沼市で「すがとよ酒店」を営む菅原文子さんは、東日本大震災で夫とその両親を失った。夫は、目の前で津波に飲まれて行方不明となり、1年3カ月後に発見された。行方不明の夫に向けてつづった「夫への恋文」が手紙コンクール「恋文大賞」となっている。シンポジウムでは、その手紙も菅原さんが朗読した。

菅原さんは「元日にまさかの能登半島地震が起き、心が乱れた。東日本大震災で被災した私たちはフラッシュバックになり、みんな涙を流している。あの方々の悲しみ、苦しみは13年前の私たちの姿。私たちが歩んできた13年を、あの方々もおそらく同じような思いで生きていかなければならないと思うと本当につらい。自然災害はいつ起こるかわからない。これからも起こる。今現実に起きている災害を見てみなさんはいろんなことを学び取ってほしい。強く生きていくためにも、穏やかな安らぎのある生活を守るために、いろんなことを今起きていることから学んでほしい」と学生に語りかけた。

そして、「気仙沼には浄土真宗のお寺はなく、お念仏のことを全く知らなかった。震災直後に浄土真宗の僧侶とご縁をいただき、京都のご本山に招かれて初めて参った。御影堂、阿弥陀堂に座った時に抱いた不思議な安らぎの気持ちは今も忘れない。そこから浄土真宗とのご縁をいただいた。鍋島先生とお会いする中で、自分の中で、悲しみ、苦しみが生きる力に変化していった」と振り返る。

仏教の学びによって自己を深く見つめることができたという菅原さんは、中央仏教学院の通信教育も受講し、み教えを深く学んだ。

「自分だけが生きてしまった。じいちゃん、ばあちゃんを助けられなかった悲しみ、苦しさ。地域のすべてのものを失ってしまった悲しさ。どうしていいかわからなかった苦しみ。そういったものが一つになって、船の碇のように私の体のどこか真ん中で私がぶれないように、迷わないように支えてくれているように思う。悲しみがあるから生きていけると思った。うれしいことより、悲しいことの方が自分を見つめることができる。悲しいけれども、その悲しみがあるから『よしがんばるぞ』『見ててね』と亡くなった人たちに応えることができる。お念仏をしながら、自分を立て直している毎日」と語った。

最後に菅原さんは自己の体験を振り返り、「『がんばってください』と数限りなく言われた。そのお気持ちはわかるけれども、この言葉は、私たちにとってとてもつらいものだった。がんばっているのに、その上にさらに『がんばって』と言われると心が張り裂けそうだった。どんな言葉がと聞かれた時は、『大丈夫です。みんなで応援します』『みんな思いを寄せて涙しています』と言われたほうがよかったと答えている」と学生に語りかけた。

「『何とか前を』と励まし合う」
穴水町の住職に聞く
能登半島地震から1カ月

能登半島地震発生から1カ月が経った。震度6強の強い揺れに見舞われた穴水町の比良地区にある真龍寺（幽経一郎住職）と法栄寺（比良祐之住職）の様子を聞いた。

真龍寺の幽経住職(62)は「約8割の門徒さんが被災していると思われる。連絡のついた門徒さんと、生存できたことを互いに喜び、『何とか前を向いていこう』と励まし合った。自宅が大きな被害を受けた門徒さんの中には、子どもや親族らを頼って金沢市などへ移り住んだ人もいる」と話す。

幽経住職は1月1日を振り返り、「地震後に津波警報が出たので、門徒さんや地域住民など50人ほどが避難してこられた。その夜は石油ストーブやたき火を囲んで不安な一夜を過ごした」と話す。

本堂は土壁が剥がれ落ちるなどし、余震などで倒壊の危険があることを示す赤紙が貼られる。幽経住職と家族は、比較的被害の少なかった庫裏で生活しているが、断水は続いている。

幽経住職は「公共施設などに避難している門徒さんの所に足を運び、自宅で暮らす門徒さんとは携帯電話などで連絡を取っている。今後のことを考える余裕は今はないが、被災した門徒や地域の人たちの心の支えとなれるような寺院でありたい」と話した。

法栄寺の比良住職(65)は、かおり坊守(60)と避難所にいる門徒を見舞い、そこに避難する門徒総代や門徒から様子を聞いているという。「避難所の世話役をしている門徒さんは『今は避難所の維持で精いっぱい。避難所で暮らす人がいなくなったらお寺に顔を出したい』と話されていた。みんな、今は命をどうつないでいくかで精いっぱいの状態だと思う」と話す。

比良住職は「門徒のほぼ全員が被災していると思う。高齢で一人暮らしの人が多く、子どもや親戚、知人などのもとに身を寄せている場合が多い。移転先の住所を把握して、手紙や電話で関係を維持していくようにしたい」と話す。

同寺は高台にあり、地震後の津波警報で、門徒を含む地域住民30人ほどが境内に避難。石油ストーブを持ち出して暖を取りながら一夜を明かした。

また、庫裏の裏山が崩落し、土砂が建物に迫ったが、門徒らがすぐに駆けつけ、木材と合板で庫裏を囲い土砂の流入を防いだという。比良住職と家族は現在、その庫裏の被害の少ない部屋で暮らす。比良住職は「厳しい状態が続くが、すぐに駆け付けてくれた門徒さんたちの存在は大変に心強い。寺に心を寄せてくれる方々は少なくはない。過疎、高齢化が進む中での被災ということだが、何とか工夫してご縁をつないでいきたい」と語った。

「私も何か」と手作り募金箱
大分・浄周寺　小5寺族が報恩講で募金呼びかけ

「地震で困っている人に」と、大分県豊後高田市・浄周寺寺族の永松和花さん（小5）は冬休みに能登半島地震支援の募金箱を手作りし、1月14日に営まれた同寺の報恩講で募金を呼びかけた（写真）。

和花さんの父・秀康住職(52)はクリニックを営む内科・小児科医で、2011年の東日本大震災では医療支援チームとして宮城県石巻市の被災地に赴いた経験を持つ。父から被災地の話をたびたび聞いてきた和花さんは、能登半島地震の様子をテレビで見て、「私も何かしたい」と父に相談、募金箱を作ることにした。

当日、和花さんが両手で抱える募金箱に参拝者が次々と近づき協力していった。和花さんは「助けたい気持ちはみんなも一緒なんだなと思った」と話す。

集まった募金は秀康住職が本山の「たすけあい運動募金」に送った。和花さんは「食べ物とかトイレとか、石川県の人たちが今困っていることに使ってほしい」と、大分から心を寄せている。

令和6年能登半島地震 災害義援金送付先は2面

本願寺新報
hongwanji journal
2月10日（土曜日）
毎月1日・10日・20日発行
発行所　本願寺新報社
京都市下京区堀川通花屋町下ル　浄土真宗本願寺派（西本願寺）本願寺出版社内
〒600-8501
電話 075(371)4171(代) ／ FAX075(341)7753

御本山御用達
開明社々員
京法衣事業協同組合加盟
satsumaya KYOTO
株式会社 さつま屋法衣店
〒600-8334 京都市下京区油小路通六条下ル
TEL 075-351-1548(代) FAX 075-351-1008
0120-310-063
https://satsumaya.kyoto

新しい「領解文」（浄土真宗のみ教え）

南無阿弥陀仏
「われにまかせよ　そのまま救う」の　弥陀のよび声
私の煩悩と仏のさとりは　本来一つゆえ
「そのまま救う」が　弥陀のよび声
ありがとう　といただいて
この愚身をまかす　このままで
救い取られる　自然の浄土
仏恩報謝の　お念仏

これもひとえに
宗祖親鸞聖人と
法灯を伝承された　歴代宗主の
尊いお導きに　よるものです

み教えを依りどころに生きる者　となり
少しずつ　執われの心を　離れます
生かされていることに　感謝して
むさぼり　いかりに　流されず
穏やかな顔と　優しい言葉
喜びも　悲しみも　分かち合い
日々に　精一杯　つとめます

赤光白光

「諸行無常」とは、因縁によってつくられたものは常に変化してとどまることがないという、釈尊が明らかにされた根本真理である。よく知られる「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」（『平家物語』）のように、儚さや「もののあはれ」を大切に汲み取ってきた日本人にとっては、最も身近な仏教の教えともいえるだろう。

▼しかし、形あるものはいつかは壊れ滅ぶ、生あるものも必ず死ぬという現実を正面から突きつけられると、受け止めきれないのが私たちである。ましてや突然、平穏な暮らしや大切な人の命を奪われた人ならなおさらで、その胸中は計り知れない。

▼「私たちは震災で無常を痛感しましたが、お釈迦さまが説かれた無常は、形あるものがなくなっていくことばかりではありません。移り変わりの中でご縁が育まれ、新しいものが生まれていくこともまた無常です」。2013年3月11日、東北の被災地で傾聴を続けてきた僧侶は、津波で家族3人を亡くした菅原文子さん宅の3回忌法要でこう語りかけた。

▼日常を奪われ、家族と引き裂かれ、前を向こうにもどこが前かさえわからない人がいるだろう。新しいものよりも、ただ失ったものを取り戻したいと願う人もいるに違いない。僧侶の言葉はまだ力になれないかもしれない。それでも寄り添い続けたい。あの時、文子さんは「『無常』が『希望』に聞こえました」と僧侶に答えた。新たなご縁をみんなでつなぎ、共に生きていきたい。

旬の味覚にひとひらそえて。
京ゆば　湯葉弥
京・五条御前東　電話〇七五―三一四―五七八八
http://www.yubaya.co.jp

修理などについてもお問い合わせ下さい
雅楽用打ち物・経切太鼓
その他宗教用太鼓一式製造元
創業元禄初年
大笹屋
京都市左京区聖護院蓮華蔵町36
TEL　075-751-6889
FAX　075-751-7304
E-mail:m@ozasaya.com

施設管理は、
オリックス・ファシリティーズ株式会社
本店
〒600-8385
京都府京都市下京区大宮通仏光寺下る五坊大宮町99
TEL 075-841-7550(代表)
FAX 075-841-7666

香老舗　薫玉堂　KUNGYOKUDO
伽羅・沈香・線香・匂い袋
創業文禄三年(1594年)
薫玉堂
〒600-8349
京都市下京区堀川通西本願寺前
電話(075)371―0162

ロングセラー書籍！　仏教が楽しくなる本！
くらしの仏教語豆事典
〈上巻〉276頁／〈下巻〉240頁／文庫判　各660円(税込)
文 辻本 敬順　絵 寄藤 文平
見開き2ページ完結だから、どこからでも読める！
私たちのくらしの中に溶け込んでいる
日常語の元をたどれば、
あれも、これも、仏教語だった!!
いままで知らなかった、ことばの「ほんとう」の意味をわかりやすく解説した全225話。日本のくらしと仏教がいかに関連深いかがわかります！
上　下
本願寺出版社　0120-464-583　FAX 075-341-7753
〒600-8501 京都市下京区堀川通花屋町下ル(西本願寺) https://hongwanji-shuppan.com/
発送梱包手数料別(税込3,000円以上は無料)